譲歩節と「節連接とモダリティの階層」（その２）

角　田　三　枝

【キーワード】譲歩、トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノ

1. はじめに

譲歩を表す接続表現として、前回、角田（2006c）（「譲歩節と「節連接とモダリティの階層」（その１）」）において、テモ、ヨウガ、ヨウト（モ）、ヨウガ…マイガ、ヨウト…マイト、ニシロ、ニセヨ、トシテモ、ニシテモ、デアレ、トイエドモなどを扱った。今回は、トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノについて、その形態、意味、統語の関係を考察する。またその意味を筆者の提案した「節連接とモダリティの階層」（角田2003、2004b）の五つのレベルとの関連で述べる。

トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノについて言えば、これらの接続表現は、「節連接とモダリティの階層」の五つのレベルの中で、すべてⅣ「判断の根拠」か、Ⅴ「発話行為の前提」のレベルのどちらかの節連接を表す表現と言える。どちらもⅣかⅤのレベルの節連接しか表さないので、似たような意味を表すこともあるが、実は意味も形も異なっている。

２節では、簡単に「節連接とモダリティの階層」の五つのレベルを紹介する。３節では、トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノの個々の表現について、意味、用法の観点から形態との関係を考察する。４節では、統語的な違いについて述べる。５節はまとめである。

2.「節連接とモダリティの階層」の五つのレベル

角田（2001、2002、2003、2004a、2004b、2006a、2006b、2006c）、Tsunoda

（2005a、2005b.）は、複文の節の結びつきについて、(i) 主節のモダリティと、(ii) 従属節と主節の意味関係から、五つのレベル（節連接とモダリティの階層）を提案し、その五つのレベルが、原因・理由、条件、逆接その他、さまざまな意味を持つ接続表現の使い分けを統一的に説明することができることを述べた。

「節連接とモダリティの階層」の五つのレベルについては、「譲歩節と「節連接とモダリティの階層」（その１）」において簡単に説明した。さらなる詳細は、角田（2004b）を参照されたい。五つのレベルをI「現象描写」、II「判断」、III「働きかけ」、IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」と呼ぶ。ここでは、各レベルの特徴と、原因・理由、条件、逆接を表す接続表現と五つのレベルとの関係を表す表（表１）のみ提示する。

I「現象描写」のレベル

主節が実際に起きた現象、今ある現象、あるいは習慣的に起こる現象などを述べる。未実現の事態の場合も既実現の事態の場合もある。このレベルでは、従属節と主節の連接は、従属節で述べる出来事と主節で述べる出来事との事態としてのつながりを描く。

II「判断」のレベル

主節が話者の判断を表す。義務、免除、許可、推測、後悔、感情、願望、意思、警告、真偽判断などを表す。このレベルでも、I「現象描写」と同様に、従属節と主節の連接は、従属節で述べる出来事と主節で述べる出来事との事態としてのつながりを描く。しかし、主節が話者の判断を表すという点で、I「現象描写」とは異なっている。

III「働きかけ」のレベル

主節が話者から相手への働きかけを表す。助言、依頼、勧誘、禁止、命令などを表す。このレベルでも、I「現象描写」、II「判断」と同様に、従属節と主節の連接は、従属節で述べる出来事と主節で述べる出来事とのつながりを描く。しかしながら、主節が相手への働きかけを表すという点で、I「現象描写」、II「判断」とは異なっている。

以上、I「現象描写」、II「判断」、III「働きかけ」のレベルでは、従属節と主節の間の出来事、あるいは事態としてのつながりに注目している。そのうえで、主節のモダリティとの共起関係によって、三つのレベルに分けられる。

一方、以下のⅣ「判断の根拠」とⅤ「発話行為の前提」のレベルは、従属節と主節の連接が、出来事としてのつながりではなく、話者の意識の中における、認識上のつながりを表す。別の表現を用いると、従属節は、主節のモダリティの部分との結びつきの関係を表しているとも言える。主節のモダリティとは、すなわち話者の発話態度そのものである。

Ⅳ「判断の根拠」のレベル

すでに述べたように、このレベルでは、従属節で述べる内容と、主節で述べる内容が、実際の出来事としてつながっているわけではない。このレベルの節の連接として主なものは、従属節が判断の根拠を表し、主節が判断を表すような意味関係が成立する場合である。従属節で述べる内容を根拠として、主節で判断を述べる。

Ⅴ「発話行為の前提」のレベル

このレベルにおいても、従属節で述べる内容と、主節で述べる内容が、実際の出来事としてつながっているわけではない。このレベルでの節の連接は、主節が発話行為を表し、従属節はその発話行為の前提、前置きを表す関係になっている。従属節が、主節の発話行為を行うこと自体の前提となる場合である。

このように、五つのレベルを設定すると、様々な接続表現をどのレベルで用いることができるか、あるいはできないか、また、異なった接続表現のさまざまな用法の使い分けを体系的に、統一的に記述することが

表1　「節連接とモダリティの階層」の五つのレベルと接続表現

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
原因・理由					
タメ(ニ)	+	(+)	–	–	–
ノデ	+	+	(+)	(+)	(+)
カラ	+	+	+	+	+
条　件	(+)				
ト	+	(+)	(+)	(+)	(+)
バ	+	+	(+)	(+)	(+)
タラ	+	+	+	(+)	(+)
ナラ	–	(+)	(+)	+	+
逆接	(+)	(+)			
ニモカカワラズ	+	(+)	–	–	–
ノニ	+	+	(+)	–	–
ガ・ケレド	+	+	+	+	+

できる。五つのレベルと原因・理由（タメ（ニ）、ノデ、カラ）、条件（ト、バ、タラ、ナラ）、逆接（ナガラ、ニモカカワラズ、ノニ、ガ・ケレド）を表す接続表現の用法との関係は、表1のようになる。（表の中で、「＋」は当該の接続表現を用いることができること、「−」は用いることができないことを表す。「（＋）」は、特定の条件の場合のみ用いることができることを表す。）

以下、本論では、譲歩を表す接続表現のうち、トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノと「節連接とモダリティの階層」の関係をみる。

3. トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノの形態と意味

3.1 形態

トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノの三つの表現は、これから述べるようにそれぞれ異なった用法がある。それにもかかわらず、以下のような文のなかでは、どの表現を用いても似たような意味を表すこともできる。

（1） 立春［とはいえ／と（は）いっても／とはいうものの］、外はまだ寒い。

（2） 管理職［とはいえ／と（は）いっても／とはいうものの］、実際の仕事は肉体労働が多く、夜も遅くなることが多かった。

トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノは、上記の例のように、節と節の連接の場合のみならず、以下の3.2節以下の考察で示すように、独立した文と文を連接する場合にも用いる。しかしながら、まず、はじめに述べると、トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノという表現は、すべて、五つのレベルに関していえば、Ⅳ「判断の根拠」、Ⅴ「発話行為の前提」の節連接を表す接続表現である。これらの表現は、従属節で述べる出来事と主節で述べる出来事を事態の連続としてとらえるときに用いるのではなく、つねに、従属節で述べた内容を前提として、主節で話者の判断や、発話行為としての意見、述べ立てなどを行う場合に用いる表現である[1)]。

したがって、これらの表現と「節連接とモダリティの階層」の五つのレベルとの関係は、以下の表2のようになる。

トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノには共通して、トイウ

という部分が、それぞれ異なった形態として、含まれている。

表 2　トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノと
「節連接とモダリティの階層」

	I	II	III	IV	V
トハイエ	–	–	–	+	+
ト（ハ）イッテモ	–	–	–	+	+
トハイウモノノ	–	–	–	+	+

前回「譲歩節と「節連接とモダリティの階層」（その１）」の中で、トスルという部分を、前提化を表す形態部分として扱ったが、ここで述べるトイウも、前提化を表す部分と考えることができる。また、ハという取立ても含まれている。ト（ハ）イッテモの場合は、ハが入る場合と入らない場合があり、ハが入る場合のほうが強調的な意味になるようである。しかしながら、意味の質としてはあまり変わらないと思われるので一緒のものとして扱う。

さて、このトイウの部分は、引用を表す「と」と動詞「言う」から成ることは、形態からして明らかである。トイウは、引用の形として、(i) 話者自身を含めて、誰かが発言した内容を受けたり、(ii) 一般的に言われること、すでに話者が了解していることなどを表す表現である。トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノの三つの接続表現の中で、ト（ハ）イッテモを用いる場合は、具体的な談話において、上記 (i) のような場合もあるが、とくにトハイエ、トハイウモノノを用いる場合は、(ii) のようなより抽象化した場合が多い。

ここで、トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノという三つの表現の形態の特徴をみる。あとでみるように、この形態の特徴はそれぞれの接続表現の意味と用法に深く関連していると思われる。

まず、トイウのイウに関して言えば、三つの表現は表 3 のようになる。このことを確認し、それぞれの意味、用法を以下にみてゆく。以下、例

表 3　「イウ」の部分の形態の違い

トハイエ	イエは、イウが未確定[2]の段階の形。
ト（ハ）イッテモ	イッテは、イウが確定し、テ形となったもの。
トハイウモノノ	イウモノノは、イウが確定し、さらにそれにモノがついてより確実になっている[3]。

文の出典がある場合は、著者名を略して、文末のカッコで示す。それがないものは作例である。下線や注釈などは筆者による。

3.2　トハイエ

トハイエは、以下のような文の中で用いる。

（3）　控訴中とはいえ、第一審は有罪の判決だった。（星）（V）

（4）　予想通りとはいえ、その敗北はあまりにも惨めだった。（沢木）（IV）

（5）　建設業とはいえ、仕事の内容は一種のトビで、数十メートルもの高さがあるハイウェイに、命綱をつけて防音壁を取りつけるといったようなことをするらしい。（沢木）（IV）

（6）「いかに研究のためとはいえ、あんたをだまして利用し、ひいてはあんたをのっぴきならん状況に追いこんでしまった。…以下略」（村上）（V）

（7）　いくらコーヒー好きとはいえ、これだけのコーヒーを一人で飲みきれるものではない。（村上）（IV）

（8）　便利とはいえ、駅のとなりに住むのも気が進まない。（IV あるいは V）

（9）　おもしろくないとはいえ、学校へは行かなければならない。（IV あるいは V）

（10）　このトルコ独特の慣習によって、スルタンの小姓のほとんど全員が、回教に改宗したとはいえ、もとキリスト教徒の奴隷なのである。（塩野）（V）

（11）「私が認められないとはいえ、お祝いを欠席するとはどういうことなの？」（ドラマ『チャングム』）（V）

（12）「許しがたいことです。富と権力に目がくらんだとはいえ。」（ドラマ『チャングム』）（V）

（13）たとえ知らなかったとはいえ、会社の持ち物であるマンションを担保に五百万円もの借金をし、それを親類が使っていたとなったら、必ずや責任を取って辞職すると言い出すのは目に見えている。（赤川）（IV）

トハイエを用いる場合、従属節には例（3）～（5）のように名詞だけが現れる場合も、（8）、（9）のように形容動詞、形容詞だけが現れ

る場合もある。また、（６）、（７）のように名詞句や、（10）～（13）のように述語の終止形を伴う節が現れる場合もある。従属節にこうしたものが現れるのは、以下に述べるト（ハ）イッテモ、トハイウモノノについても同じである。

トハイエを用いる場合、上記の例に表れているように、従属節と主節の連接が表す意味は、「従属節の内容を前提としても、（話者としては、なおかつ）主節で述べる内容のように考える、あるいは主節で述べている内容を述べる」という意味関係になっている。すでに述べたように、「節連接とモダリティの階層」の五つのレベルに関しては、つねにⅣのレベルか（例（４）、（５）、（７）、（13）および場合によっては（８）、（９）も）、Ⅴのレベル（例（３）、（６）、（10）、（11）、（12）および場合によっては（８）、（９）も）の連接を表していると言える。

なお、話者というのは、（６）、（11）、（12）のように実際の会話の中で話者である場合もあるが、小説の中などでは、作者が地の文の中で、登場人物の気持ちを描く場合もあれば（例（４）、（５）、（７）、（13））、作者自身が物語を語る場合（例（３）、（10））もある。（こういった場合も含めて、本論では「話者」という言葉を用いる。）こういった小説内での用法では、（３）のように、主節で実際に起きた現象を述べる場合もあるが、あくまでも作者が、主節で表す内容を読者に対して述べているのであって、Ⅰのレベルではなく、ⅣあるいはⅤのレベル（（３）の場合はⅤ）の連接であることには変わりない。

こうした意味関係は、従属節と主節の連接の場合だけではなく、以下の例のように、独立した文と文との連接の場合にも同様である。

（14）　従って、純子にとって会社とは結婚相手を捜すための媒体にすぎないのである。とはいえ、父の知人の口ききで入社したので、どうもロクなのがいませんから、と辞めるわけにもいかず、もう三カ月も勤めている。（赤川）（Ⅴ）

（15）　それまで安易な戦闘に慣れてきた城木の目には、その切迫した光景と雰囲気が実際以上に不吉なものに映った。とはいえ、この珊瑚海海戦は、客観的に見て日本の勝利といってよかった。（北）（Ⅳ）

（16）　とくに、巨砲は、操作がいっそう困難なためか、注意に注意して操作しても、一日に七発しか発射することができなかっ

た。とはいえ、その七発の砲丸の与えた損傷にいたっては、他のすべてをしのぐほど大きかったのである。（塩野）（V）

（17）彼なら決して間違いをしでかすはずはない。まかり間違っても楡病院の金を一銭銅貨一枚たりともちょろまかす怖れはないのだ。とはいえ院代にとっては、自分よりかなり年配のこの会計係が、かつて試験恐怖症に悩んだ自分よりずっと神経質でおろおろしているところをみるのがかなりの愉悦であったことは争えない。（北）（V）

トハイエ、を用いる場合は、上記の例に表れているように、トハイエに先行する従属節、あるいは文の中では、話者を含む誰かが実際に言ったことを引用するというよりも、話者が了解していること、話者が考えることなどを表す場合が多い。トハイエに先行する従属節、あるいは文の中では、話者の胸中、判断を表すことがある。そして、トハイエに続く主節、あるいは文との関係で、話者（あるいは登場人物）の心の葛藤を表すのである。例（4）、（6）、（8）、（9）、（11）、（12）、（13）、（14）、（17）などはその例である。

こうした話者の心の葛藤を表す用法は、特に、トハイエという形態にも関係があるように思われる。上記の表3で、トハイエという表現の中では、イウが未確定の形であると述べた。イウを未確定の形にすることによって、トイウに先行する部分が、客観的な事実というよりも、自らの思い、判断であるということ、あるいは仮にそうだと前提するとしても、なおかつ主節の内容のように考える、あるいはそのことを述べる、という意味内容を表しているように思われる。

3.3　ト（ハ）イッテモ

ト（ハ）イッテモは、以下のような文の中で用いる。この表現の性質上、少し長めに例文を示す。

（18）翌日はあいにく雨降りでしたが、わたしたちは引越しを決行しました。引越しといっても、大した荷物があるわけではありませんから、ごくお手軽なものです。（三浦）（V）

（19）ここ二、三日は「魅せられた魂」を読むのについやされた。読むといっても、二、三日で第一巻の半分程である。（高野）（V）

(20)　そう言って基一郎は自分のコップにボルドーをつがせた。ボルドーといっても、ボルドー酒とは縁もゆかりもない飲料である。（北）（V）

(21)　新しい時代の為政者として森有礼を尊敬していただけに吟子の受けたショックは大きかった。「いかに政府の高官といっても、そんな勝手なことが許されるわけはありません。…以下略。」（渡辺）（V）

(22)　ボクサーは体のさまざまな箇所を痛めるが、その中でも口は特別の部分である。いくらマウスピースで守っているといっても、のべつ顔を殴られつづけているのだ。（沢木）（IV あるいは V）

(23)　「高根君が退いたので、今度大阪社長をしている野々宮君に東京本社へ戻ってもらうことにした。同時に森川君には大阪へ行ってもらうことにした」百貨店ニュース社の大堂社長が長い顔をなんだか無理に胸もとにひきつけるしぐさをして、重大発表のような口調で言った。（…途中略…）
大阪支社長が交代するといっても、大阪支社というのは手伝いの女の子が一人と支社長一人という程度の規模なので、それによって何かが大きく変化する、という訳でもなかった。（椎名）（IV あるいは V）

(24)　その後、タンゴに凝った時期があった。といっても、レコードの生き字引きみたいな鑑賞法には関心はなかった。（五木）（V）

(25)　しかし一度精通してしまうと、言い換えれば一度そのコツを習得してしまうと、その能力は簡単に消え失せてしまったりはしない。これは自転車や水泳と同じだ。とはいっても練習がいらないわけではない。（村上）（V）

(26)　「しかし、調べられるからには、なにか原因があるはずだ」
「といっても、この 1 年間、粗製モルヒネの払い下げは、一ポンドも受けていないのだ。」（星）（V）

(27)　太郎の母親の山本信子は、戦前、商社員だった両親と共に、ロンドンで暮らしたことがある。そのために少し英語ができるので、翻訳家として多少名前が知られている。といっても

ディケンズや、ジョイスやフォークナーを訳しているのではない。（曽野）（V）

上記の例のうち、（18）～（23）は、ト（ハ）イッテモが、節と節を結んでいる。（24）～（27）は、独立した文と文を結んでいる。これらの例に見られるように、ト（ハ）イッテモという表現は、実際に話者が述べたこと（例（18）、（19）、（20）、（24）、（25）、（27））や、その状況で他人が述べたこと（例（23）、（26））を受けたり、文脈の中ですでにわかっていることを受けて（例（21）、（22））、主に、話者が「このようなことを言ったが、（このように言うと、（相手は）～と考えるかもしれないが、）実際は～である」というような意味を表現するときに用いる。「相手」というのは、会話の相手であったり、書き手からみた読者である場合もある。いずれにしても、「相手」に対して語る場合が多いので、「節連接とモダリティの階層」の五つのレベルに関して言えば、Ⅴ「発話行為の前提」のレベルになることが多い。ただ、小説などにおいて、一人称で語るようなタイプのものでは、その語り手が心の中で思ったことを描く場合（例（22）、（23））もある。こういった場合は、Ⅳ「判断の根拠」のレベルとも言える。このように、相手がある言葉から、相手が思い描くような状況と実態との食い違いを述べる場合や、自分自身の見解を方向修正する場合もある。

したがって、ト（ハ）イッテモを用いる場合は、例（18）、（19）のように何らかのものについて、主節で実際の程度を語ったり、相手の推論を否定するというところから、文末にワケデハナイ（例（23）、（25））といった表現が現れることも多い。

なお、実際に（主に直前に）誰かが言ったことを直接受けて、ト（ハ）イッテモを用いる場合（例（18）～（20）および（23）～（27））は、トハイエに言い換えにくい。一方、例（21）、（22）のように、話者がすでに了解していること（（21）では、森が政府の高官であること、（22）では、ボクサーがマウスピースをつけること）を述べるような場合には、トハイエとも言い換えやすいようである。

また、意味としては、話者がすでに了解していることを述べる場合であっても、ト（ハ）イッテモは、トハイエやトハイウモノノに比べて、より口語的、日常会話的である。例えば、以下のような言い方は、トハイエ、トハイウモノノで言い換えることはできない。

(28) そんな格好で出かけるの？流行［とはいっても／＊とはいえ／＊とはいうものの］ねえ…。

トハイエ、トハイウモノノは、会話でも用いるが、やや古風でかしこまった響きがある。

さて、このように見ると、ト（ハ）イッテモのもっとも特徴的な用法は、誰かが実際に言ったことを引用するような用い方である。3.1節で、ト（ハ）イッテモでは、イウが確定シテ形になっているということを述べた。3.2節で述べたトハイエの場合に対し、ト（ハ）イッテモを用いる場合は、イウに先行する部分が、実際に話者あるいは誰かが発言した内容であったり、その発話場面における客観的な事実なのである。このことは、イウが確定した段階であるという形態の特徴と合致しているように思われる。

3.4　トハイウモノノ

トハイウモノノは以下のように用いる。

(29) 立春とはいうものの、春はまだ遠い。（友松、他）（VI あるいは V）

(30) オリンピックは「参加することに意義がある」とはいうものの、やはり自分の国の選手には勝ってほしいと思う。（友松、他）（VI あるいは V）

(31) これもまた、検察側は手を焼いた。松下を引っぱるには署長を交代させなければならない。権限によって可能だとはいうものの、さらに事をこじらせるばかりだ。（星）（VI あるいは V）

(32) 女三の宮のときは、義理やら何やらで、のっぴきならぬ立場に立たされ、やむを得なかった――とはいうものの、なぜ、あれを裏切るようなことをしてしまったのだろう。（田辺）（IV）

(33) 何か雑誌を持ってくればよかった、と私は後悔した。何かを読んでいれば眠らずにすむし、時間は速く過ぎてしまう。しかし時間を速くすぎさらせることがはたして正しいことなのかどうか、私にはわからなかった。おそらく今の私にとって時間はゆっくりと経過させるべきものなのだろう。とはいう

もののこのコイン・ランドリーの中でゆっくりと過ぎていく時間にいったい何の意味があるというのだ？それは消耗を拡大するにすぎないのではないだろうか？（村上）（Ⅳ）

（34）「縁がないことなど、あるものか。私をそう心浅い人間と思うのか。いつまでも気長く私の誠意を見てほしい。とはいうものの、人の命はあてにならぬものだからね。こんどのことで思い知らされた。いつまでも、とはいえないのが人間の運命だね」（田辺）（Ⅴ）

上記の例のうち、（29）～（32）は、トハイウモノノが、節と節を結んでいる。（33）、（34）は、独立した文と文を結んでいる。例に表れているように、トハイウモノノを用いる場合は、「従属節で述べる内容は事実である、あるいはわかりきったことであるという前提において、なおかつ（話者としては）主節の内容のように考える、あるいは述べる」といった意味を表すと思われる。この意味関係は、従属節と主節の連接の場合ではなく、文と文との連接の場合にも同様である。

3.1節の表3で、トハイウモノノの場合、トイウが確定し、さらにそれにモノがついている形であると述べた。モノについて言えば、モノという名詞を付け加えることによって、トハイウモノノに先行する内容について、象徴的に確定度の高まりを表しているのだと思われる。つまり、トイウに先行する部分が、（i）話者本人の個人的な判断ではなく、広く大勢の人が言っていることを表したり、一方、（ii）話者本人の個人的な判断であってもそれが強い確信、感情であることを表すのである。また、確定度の高まりというよりも、（iii）比較的長くあれこれ考えあぐねて結論に到達し、しかしやはり納得できないというような心の葛藤を表す場合もあるようである。（29）、（30）は（i）の場合の例であり、広く世間でいうことを述べているのに対し、（31）、（32）、（34）は、話者の強い確信、感情を描いている。（33）は（iii）の場合であり、トハイウモノノが受けているのは、直前の文の内容だけではなく、筆者の印象としては、段落のはじめのところからの話者の心の葛藤全体を受けているように思われる。

以上、トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノについて、意味、用法と形態について考察した。三つの表現は、それぞれ形態の違いが、意味や用法の違いに反映している。さらに、統語的な違いについて以下

考察したい。

4. 統語的な問題

ここでは、従属節と主節との結びつきの制限に、構造的な問題があることを考察する。特に、トハイウモノノという表現と他の二つの表現との違いをみる。すでに3.1節の表3において、トハイウモノノの場合は、イウが確定している上にモノによってさらに確実になっているということを述べた。このことは、従属節にタトエ、イクラ、イカニなどといった不確実な意味を表す言葉を用いることができるかどうかにも表れている。以下の（35）、（36）、（37）はその例である。3.2節以下の考察でもいくつか実例をあげているが（例（6）、（7）、（13）、（21）、（22）参照）、トハイエ、ト（ハ）イッテモを用いる場合は、タトエ、イクラなどが従属節に現われることがある。一方、トハイウモノノを用いる場合は、そういった言葉とは共起しない。

（35） たとえ知らなかった［とはいえ／と（は）いっても／＊とは言うものの］、あなたのしたことはまぎれもなく犯罪です。

（36） いくらコーヒー好き［とはいえ／と（は）いっても／＊とは言うものの］、ポット一杯分を一度に飲めるものではない。

（37） いかに大統領［とはいえ／と（は）いっても／＊とは言うものの］そんな勝手なことが許されるわけはない。

このように、形態の違いは、意味の違いに反映している。そして、以下に述べるように、統語的な違いもあると思われる。

以下の例文では、トハイエという表現を用いている。しかしながら、ト（ハ）イッテモとは言い換えにくく、トハイウモノノは言い換えると非文になるように思われる。

（38） しんとした工場をぬけて、貯水池のふちへ出てみると、春さき［とはいえ／？と（は）いっても／＊とはいうものの］、まだ冬のなごりのつめたい風が底まですきとおった水面にたえず皺をたたんでいるというのに、兄はひとり、鳶口をもって、けれどもべつだんそれを使うふうもなく、ただ筏から筏へと、せわしなくとび移っているのであった。（三浦）（V）

（39） ホームから線路の下をくぐって駅舎に通ずる洞窟のような地

下道を行くと、真夏［とはいえ、／？と（は）いっても／＊とはいうものの］北国の夜気はさすがにひんやりと首筋をなぜ、思わず身も心もひきしまるような思いがした。（三浦）（V）

（40）　ただひとつわかっていることは私がなりゆき上［とはいえ／？と（は）いっても／＊とはいうものの］『組織』を裏切ってしまったということだった。（村上）

上記の（38）では、トハイエ節が、ト節、ノニ節、などにはさまれていて、トハイエ節の主文にあたる「まだ冬のなごりのつめたい風が底まですきとおった水面にたえず皺をたたんでいるというのに」の部分は、文の終止形ではない。全体の文自体は、さらに続いている。

また、（39）、（40）では、トハイエ節は挿入句的に用いられている。（39）では、文全体の主節が、ト節の主節でもあり、トハイエ節の主節でもあるというような意味関係になっている。また、（40）では、「～ことは、～ことだ」という構文の中に、トハイエ節が入り込んでいる形になっている。やはり、文全体の主節が、「～ことは」を受けるものでもあり、同時にトハイエ節の主節でもあるというような意味関係になっている。両方の例に共通なこととして、それぞれの例において、トハイエ節の部分を取り去ってしまっても、文の形式が成立すると思われる。

3.1節で、例（1）、（2）として、トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノのうちどの表現を用いても、似たような意味を表す例をあげた。以下のものである。

（1）　立春［とはいえ／と（は）いっても／とはいうものの］、外はまだ寒い。

（2）　管理職［とはいえ／と（は）いっても／とはいうものの］、実際の仕事は肉体労働が多く、夜も遅くなることが多かった。

おもしろいことに、意味としては（38）、（39）のトハイエ節と主節の関係は、（1）の場合と非常によく似ている。それにもかかわらず、（38）から（40）のような文の連続の中で、トハイエは自然に用いることができるのに、他の表現は用いにくい。

特に、トハイウモノノを用いた実例を見ると、主節が終止形になっていて、それが同時に文全体の主節となるタイプのものが主である。主節が文の終止形にならず、さらに続いていくような場合は、きわめて少な

かった。ただ、トハイウモノノ節の直接の主節が終止形ではなくても、順接、いわゆる並列節として続いてゆく場合は、(38) の場合ほど不自然ではないように思われる。以下のようなものである。

(41) 窓を開けると、立春とはいうものの、外気はまだ冷たく、風も強かったので、外出はとりやめた。

表 3 で述べたように、トハイウモノノは、形態からみても、トハイエ、ト（ハ）イッテモよりも、高い確実性を表している。同時に、形態の長さと意味によって、表象的（iconic）に、トハイウモノノ節の独立性を高めていると思われる。ここでは、形態の独立性の高まりが、「確定した、確固とした」という意味を表すだけではなく、終止形の主節と共起しやすいというような、統語的な制限にも影響があると考えられる。

3.4節の最後の部分で、例（32）について、トハイウモノノが受けているのは、直前の文の内容だけではなく、段落のはじめのところからの話者の心の葛藤全体のような印象を受けると述べたが、そのことも、トハイウモノノという形態の表象性とも関係があるかもしれない。

南（1974）は、従属句にどのような要素が含まれるかという点で、従属節内の統語的な違いを述べた。しかし、ある接続表現がどのような主節と結びつくか、それがつねに終止形の主節であるか、非終止形の場合でもよいのか、といった違いについて体系的に述べた先行研究はないと思われる。

5. 結論

本論は、譲歩を現す表現の中から、トハイエ、ト（ハ）イッテモ、トハイウモノノについて、それらの表現の形態を考慮しながら、個々の表現の微妙な意味、用法の差異を述べた。またその用法を「節連接とモダリティの階層」の五つのレベルとの関連で示した。これらの表現はすべて、Ⅳ、Ⅴのレベルのみで用いる表現であるが、細かい違いがある。

また、形態の異なりが、意味だけではなく、従属節がどのような節と接続するかについて、統語的な制限があることも述べた。

注

1） ト（ハ）イッテモについて、以下のような例は除く。

（例）太郎は、いくら来いと言っても、来なかった。

これは、事態のレベルを表す「テモ」の使い方である。

2） この形は、現代語では命令形と同じである。確定、未確定ということについては、角田（2006c）でも述べている。

3） トハイウモノノに対し、ト（ハ）イッタモノノのようにイッタの形になる場合がある。これはトハイウモノノとは性質の違うものである。

逆接を表す接続表現の一つにモノノがある。

（例）東京まで行ったものの、彼に会わずに帰ってきてしまった。

このモノノの直前に、トハイッタという形がくる場合がある。

（例）大丈夫とは言ったものの、どうしたらよいか考え込んでしまった。

これは、モノノ節の述語がたまたま「言う」になっている場合である。イッタの形になる場合は、つねに「言った」という実質的な意味しか表さない。一方、トハイウモノノには、本論で述べるように、それ以上の特別な意味がある。よって、ト（ハ）イッタモノノは、本論では扱わない。

このように、同じイウという動詞であっても、トイウ、トイッタ、トイエ、トイッテなど、形態が異なることによって、すべて意味、用法が異なる。このことは、文法研究において形態をみることの重要さを示している。

謝辞

工藤力男先生から詳細なコメントを頂きました。心より御礼申し上げます。

引用文献

南不二男．1974.『現代日本語の構造』．大修館書店.

角田三枝．2001.「日本語のネクサスとモダリティー」．2001年度秋季大会要旨集，24－31．国語学会.

_____．2002.「接続表現および副詞句とモダリティ」．日本語教育方法研究会誌 Vol.9，No.2，6－7.

_____．2003.「日本語の節・文の連接とモダリティ」．博士論文．お茶の水女子大学.

_____．2004a.「花子は喜んでいるからいいことがあったのだろう」のカラ．日本語教育方法研究会誌 Vol.11，No.1.

_____．2004b.『日本語の節・文の連接とモダリティ』．くろしお出版.

_____．2006a.「動詞「限ル」とその派生形：接続表現、文末表現、モダリティと文法化」．『人間文化論叢』第8巻，297－305．お茶の水女子大学.

_____．2006b.「「節連接とモダリティの階層」とその応用」．『日本語学』5月号，30－39．明治書院.

_____．2006c.「譲歩節と「節連接とモダリティの階層」（その1）」．『成城文芸』196号，186－202．成城大学.

Tsunoda, Mie. 2005a. 'Clause–linkage in Japanese language teaching'. Paper presented at the 11th International Conference of the European Association for Japanese Studies, held at the University of Vienna.
_____. 2005b. 'Clause–linkage and modality'. Unpublished paper.

例文出典

友松悦子・宮本淳・和栗雅子．1996.『どんな時どう使う日本語表現文型500』．アルク．
新潮百選　CD–ROM より
赤川次郎『女社長に乾杯』
五木寛之『風に吹かれて』
北杜夫『楡家の人々』
沢木耕太郎『一瞬の夏』
椎名誠『新橋烏森　青春編』
塩野七海『コンスタンティノープルの陥落』
曽野綾子　『太郎物語』
高野悦子『二十歳の原点』
田辺聖子『新源氏物語』
星新一『人民は弱し　官吏は強し』
三浦哲郎『忍ぶ川』
村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』
渡辺淳一『花埋み』
ドラマ『チャングムの誓い』（NHK 放送）